
銀魂×緋弾のARIA SS(ダブルエス)

蒼月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

銀魂×緋弾のARIA ダブルエス SS

【Nコード】

N1501Q

【作者名】

蒼月

【あらすじ】

いつものようなハチャメチャな日常を終え、いつも通り就寝した銀時達……。

しかし、朝目覚めると全ては一変！

銀時達がいたのは幕末の『江戸』ではなく、2000?年の『東京』！しかも、ひょんなことから銀時は国語教師『坂田^{さかた} 銀八^{ぎんぱち}』として、東京武偵高校で教師をすることになってしまう……！

果たして銀時達の運命は！？

銀魂キャラクター達が緋弾のARIAの世界で繰り広げる、『大スケ

『ルSF人情アクションバトルラブコメディ』！！？

登場人物解説（前書き）

この作品での銀魂キャラクターの位置づけや、緋弾のアリアキャラクターの解説、オリジナルキャラクターの設定などです。小説の進行具合によって順次更新されるかもしれません。

登場人物解説

・銀魂キャラクター

Name…坂田さかた銀八ぎんぱち

Class…マスターズ教務科

Rank…E

Skill…『侍の魂』

決して折れることのない、銀色に光る刀の様な魂。

この不屈の魂が、銀時の超人的な強さや生命力、一流剣術の源——
かもしれない……。

Mein Weapon…木刀『洞爺湖』とうやこ

銀八が常に腰に挿している木刀で、柄に洞爺湖と彫られている。別
名『妖刀・星砕き』。

『金剛樹』と呼ばれる樹齢一万年を超える大木を削りだして作られ
たもので、鋼鉄だろうが、隕石だろうが粉碎できる強度と硬度を持
つ。ちなみにテレビショッピングで購入可能。

Sab Weapon…日本刀

武偵に一般販売されている、普通の日本刀。

質もピンからキリまであるが、使っていると磨耗してすぐに折れる
ため、半ば消耗品扱いである。

Sab Weapon…ガンブレード『銀龍』ぎんりゅう

アムド装備科の生徒達が作った銀八専用武器で、回転式拳銃の砲身の真横
に、日本刀の刀身をくつつけただけというシンプルな形状をしてい
る。

普通の刀として使えるのはもちろんのこと、柄が銃身となっている

ため弾丸を撃つことも可能。といっても銃としての機能は、弾丸を撃った時に発生する『振動』を利用する『振動剣』のギミックの一部である為、あくまでオマケ程度の威力である。

刀身には龍の彫り物が施されている。……が、デザインしたのがジヤンヌである為、銀時曰く「龍じゃねーだろこれ。ウーパールーパーだろこれ」とのこと。

Memo…『銀魂』の主人公。

銀八は本人の要望で登録している名であり、本名はもちろん『坂田銀時』。

一応、教務科に属しているが武偵の資格や教員免許を持っていない為、一般生徒と変わらない立場であり、いわば『教育実習生』の様なものである。

2年A組の副担任で、担当教科は国語。しかし、まともな授業をしない上に銃器の扱いも下手な為、ランクは最低のEを貰っている。だが生徒達からの人気は高く、学年・学科問わず慕われている。

戦闘能力も高く、木刀一本でヒステリアモードのキンジや、Sランクのアリアと互角以上の戦いができる。

・緋弾のアリアキャラクター

Name…かんざき神崎・H・アリア

Class…アサルト強襲科

Rank…S

Skill…『カドラ双剣双銃』

二丁拳銃と小太刀二刀流を使いこなす能力。

Skill…『バーリ・トウード』

総合格闘技の別名。略称はバリツ。
格闘技であれば空手、柔道はもちろんジャーマンスープレックスすらも使用できる。

Mein Weapon…コルト・ガバメント・クローン×2

『コルト・ファイヤーアームズ社』製の大型自動拳銃。使用弾薬は、45ACP弾。

豊富なカスタムパーツが存在している為、使用者に合わせてカスタマイズできる銃である。

しかし、大型でしかも弾薬の反動がキツイので、使いこなすには相当の技量が必要。

アリアはステンレスモデルとスチールモデルを一丁づつ所持している。

Sab Weapon…小太刀×2

刃渡り60センチ前後の日本刀。

アリアは制服の下の背中に仕込んでいる。

戦闘時には銀八に貸すこともある。

Memo…『緋弾のアリア』のヒロイン。

東京武偵高校2年A組所属。専攻科目は強襲科^{アサルト}。

武偵の中で最強の称号であるSランクに格付けされており、それに恥じない戦闘能力と実力を持っている。

自身の实力に見合う相棒^{パートナー}を探しており、チャリジャック事件でキンジの、病院立て籠もり事件で銀八の实力に目をつけ、2人付きまとう。

現在は『武偵殺し』の犯人を追っているようだが……？

・オリジナルキャラクター

Name…みかきばら榊原 しちか七歌

Class…アンビュラス救護科↓メデイカ衛生科

Rank…S↓C

Skill…『アスクレピオス』

治療・手術中は集中力が極限まで高まり、さらに身体能力も大幅に上がる能力。

『複数の負傷箇所を同時に治療する』、『本来なら1時間かかる手術を10分で終わらせる』、『拡大鏡も使わずに極小サイズの傷口を治療する』などといった人間離れした治療を行うことも可能。

Mein Weapon…Cz75—ショートレイル

『チェスカー・ズブロヨフカ国营会社』製の自動拳銃。使用弾薬は9mmパラベラム弾。

ショートレイル（前期型）は現在流通しているCz75より古い型だが、優秀な自動拳銃として評判が高い。数も少ないため値段も高価。

本人曰く、誰かの形見らしいが……？

Sab Weapon…スモークグレネード

点火すると煙が噴き出す非殺傷手榴弾。

敵の攻撃をかわしたり、注意を逸らしたり、仲間に信号を送ったりと、さまざまな場面で活躍する。

七歌は常に2、3個は携帯している。

Sab Weapon…医療用バックパック

メデイカ衛生科に支給される、衛生材料が入ったバックパック。

サイズは様々だが、動きやすいように普段はウエストポーチ型を携帯している生徒が多い。

Mem o…東京武偵高校2年B組所属。専攻科目は衛生科。^{メデйка}

儂げな印象をした、ストレートロングヘアの美少女。（本人自覚なし）

アルビノという遺伝子疾患を患っているため、髪と肌は雪のように白く、瞳は赤い。

不良に絡まれている所を銀時に助けられ、それ以降、何かと行動を共にするようになる。ちなみに銀時に惚れている模様。

元々は救護科に所属していたが、1年の時にある事件を機に衛生科^{メデйка}へと転科した。

常に学年上位の成績を取る優等生だが、代わりに5m走っただけでバテるほど体力がなく、運度神経も皆無。

その為、救護科^{アンビュラス}にいた頃は卓越した医療技術・知識、さらに自身の『能力』もあってSランクを取るほどの実力だったが、衛生科^{メデйка}になってからはCランクまで落ち込んでいる。

第一訓『物語の始まりって大抵、唐突』（前書き）

ようやく1話目が完成しました。駄文ですが生暖かい目で見守ってください。

第一訓『物語の始まりって大抵、唐突』

ジリリリリッ！ジリリリリッ！

目覚まし時計のアラーム音で、心地よい眠りから目覚める。

ジリリリリッ！ジリリリリッ！ガシッ！！

今だ喧しく鳴り響く目覚ましを、乱暴に掴むと……

「うるせえなんだよ、コノヤローっ！！」

八つ当たり気味に壁に向かって投げつけた！

目覚ましはガシャン！！と派手な音を立てて壁へ激突し、その衝撃でアラームが止まる。そして、再びガシャン！！と派手な音を立てて畳の上へと落ちた。

「……ったく。人がせつかく人が気持ちよく寝てたっつーのによお

……」

白髪の天然パーマ男――坂田さかた 銀時は、不機嫌そうに頭を掻きながら、布団から起き上がる。

壁に掛けてある時計を見ると――朝の7時頃を示していた。

「げ！？ やべえ、後30分位しかねえじゃねーか！！」

銀時は布団から飛び起きると、いつもの着物……ではなくしわくちゃのワイシャツを着て、折り目の付いたスーツのズボンを穿く。近くに置いてある冷蔵庫を開き、中から紙パックのいちご牛乳を取り出すと、紙パックを傾けながらゴキュゴキュとのどを鳴らして飲む。

紙パックを冷蔵庫へ戻し、畳の上に散乱している衣服の中から適当にネクタイを一本拾い上げそれを着ける。さらに壁に掛けてある白衣を羽織り、胸ポケット入っている伊達メガネを掛ける。

最後に棒付きキャンディーをくわえて、朝の身支度は完了だ。

「うし。んじゃ、いくか」

玄関をくぐり、銀時は万事屋よろずや——ではなく、現在の住まいであるワンルームの安アパートの一室を後にする。



「銀八先生ぎんぱち、おはようございまーす！」

「おー」

「あ、銀八先生だー」

「そうだよー。銀八先生だよー」

「よう、銀八ー！ いい朝だなー！ さっさと死ねー！」

「おまえが死ねー」

愛車の原付ベスパを走らせながら、朝の挨拶をしてくる生徒達へ、適当に挨拶（？）を返す。

ちなみに『銀八ぎんぱち』とは『この学校』での……いや、『この世界』での銀時の名前だ。

今、銀時がいるこの場所——武偵高ぶていこうこと東京武偵高校は、レインボーブリッジの南に浮かぶ南北およそ2キロ・東西500メートルの長方形をした人工浮島メガフロートの上にある。

島1つが丸々学校である事から、学園島と呼ばれるこの人工浮島は、『武偵』と育成する為の総合教育機関だ。

武偵とは凶悪化する犯罪に対抗するため『この世界』で新設された国家資格らしく、武偵免許を持つ者は武装を許可され逮捕権を有するなど、警察に準ずる活動ができる。

ただし警察と違うところは金で動くことで、金さえもらえれば、荒っぽい仕事でも下らない仕事でもこなす、いわば『便利屋』だ。

銀魂の読者層向けに言うのであれば、便利屋である『万事屋』と武装警察である『真選組』の、おいしい所だけを総取りしたものが武偵なのである。

その後、教員専用駐車場に愛車を止め、銀時はマスターズ教務科へと向かう。武偵高には10以上の専門科目があるが、教務科は特殊な立ち位置であり、武偵高の教職員が所属する『学科』である。

銀時……もとい銀八は、『教育実習生』の名目で教務科に属している。

教務科で学生名簿を取った後、銀八は自身が副担任を務めるクラス——2年A組へと向かった。

『2年A組』のプレートが掲げられている扉をくぐり、銀八はガヤガヤとうるさい教室へと入る。

「おい、うるせーぞおまえら。商店街の大声コンテストですかコノヤロー」

副担任が入ってくるのを見て、生徒達はそれぞれの席に着き始める。

「全員、席に着いたなー？ ホームランニングじゃー、朝のHRを始めんぞー」

「先生ー、それを言うならHRです。ホームルーム朝っぱらから教室の中でランニングさせる気ですか？」

銀八の軽いボケに対してやる気なさげにツツコンだのは、黒髪の少年——遠山 キンジだ。

この個性派……もといバカの集まりである武偵高では比較的まともな奴だ。同時にクラスの中ではもっとも影が薄いため、銀八の中では『地味キャラ』としても認識されつつある。

「おーおー、キレのねえツツコミだな遠山ー？ そんなんじゃあ、立派な漫才師にはなれねーぞ？」

「いや、ならねえしなる気もねーよっ！！」

「なに言っただよ。将来、神崎と組んで夫婦漫才やんだろ？」

「やりませんっ!!」

銀八の言葉を聞いて、遠山の隣の席に座っているピンクのツインテール少女――神崎・H・アリアが立ち上がって反論する。

「先生、言っておきますけど私は恋愛なんてくだらないものに興味ありません!」

「んだよー、新学期早々に遠山に告白したんだろーが? 別に間違っちゃ……って、あぶねっ!」

ズガンッ!!

神崎がホルスターから拳銃を抜くのが見え、銀八は反射的にその場でしゃがんだ。次の瞬間、一発の銃声が教室に響く。

神崎の撃った弾丸は、先ほど銀八の頭があった場所を通過して、後ろの黒板に穴を開けていた。

武偵高では銃器・刀剣の所持が義務付けられていて、発砲ももちろん許可されいるが……。

「――てんめっ! 神崎! 教師に向けて発砲するやつがあるか!」

銀八は立ち上がりながら、いきなり銃を撃たれた不満をシャウトする。

「うっさいわね! 最初に言ったでしょ! バカなこと言ったら風穴って!!」

「んだとコラっ!? てめーのナイーブな心に風穴を開けてやろうかあっ!!」

言い争う2人を見て、遠山はやれやれ……といった様子で頭を抱えており、クラスの面々は止めるどころか「おー、また始まったぞー!」「やれやれー!」などと2人を煽っている。

これが武偵高での銀八――銀時の一日の始まりである。
ちなみに、なぜ銀時がこの物騒な武偵高で教師をやっているとい

うと……話は2週間ほど前に遡る。

「いや、話が唐突だし、回想入るまでが長くね？」
by 銀時

第二訓『春は番組編成が多いから気をつけろ!』(前書き)

蒼月「ようやく第二話です!」

銀時「第一話を投稿してから二ヶ月近くも間があったな。なんでだ?」

蒼月「仕事が忙しかったもので……。今後は早く投稿できるようにがんばります!!」

第二訓『春は番組編成が多いから気をつけろ!』

——事件の発端である2週間前——

時は幕末の江戸。

深夜の歌舞伎町、『スナックお登勢』の2階に居を構える便利屋——『万事屋銀ちゃん』でその事件は起きた……。

『レストレード警部。残念ながら、彼は犯人ではありませんよ』
『なにっ!?!』

『ではホームズ、いったい真犯人は誰なんですか?』

『まだ、分かりませんか? この中で唯一、被害者を殺害すること
のできた犯人……』

『そ、それは……?』

『それはアナタだ! パーマネント伯爵!』

「うおおおっ!! やつぱりパーマネント伯爵が犯人だったアル!
!」

「マジかよ! 騙されたあっ!! アイツだけは絶対違うと思って
たのによー!!」

銀時と『万事屋』の従業員であるチャイナ服の少女——神楽は、
この春から始まった推理ドラマ『シャーロック・ホームズ事件簿』
の結末を観て、テンションを上げていた。

「くっそー、犯人は作家のソーラーチだと思ったのによー。第一発見
者だったし……」

「いまどき第一発見者が犯人とか古いネ。それにパーマネント伯爵
は事件が起きた時からあきらかに怪しかったアル」

「バカヤローおまえ、パーマネント伯爵の髪型見たか? 天然パー
マの奴に悪い奴はいねーんだよ」

「でも、犯人だったアル」

「あれはフィクションだからだ。現実じゃ通用しねーんだよ」

——などと2人で不毛な争いをしていると、壁に掛けてある時計が銀時の視界に入る。

「もう11時過ぎてんな……。おい神楽、寝るぞ」

「ホントネ！ 夜更かしは美容の大敵アル！ おやすみ銀ちゃん」

「おー、おやすみー」

こうして、いつものグダグダなやりとりの後、銀時達は床に就いた。

そう——ここまでは『いつも』と同じだった……。



チュンチュン——。

「う……うーん……」

小鳥のさえずりと朝日の光で、銀時は目を覚ました。

「いててっ……。なんか背中が痛えな……。ん？」

辺りを見回すと、寝ていたのは万事屋の一室……。ではなかった。

銀時が居たのはどこかの公園で、そこにあるベンチのひとつに座っていた。どうやらここ寝ていたらしく、服装もなぜか寝間着ねまぎではなく、いつもの着物姿だ。

公園の地面はコンクリート舗装され、道に沿って街路樹が植えられている。さらに遠くへ視線を向けると背の高いビルが見え、ここが都会の下真ん中にある場所だと分かる。

「俺ぁ……。なんでこんな所に……」

たしか昨日は神楽と推理ドラマを観て、そのまま寝たはずだ。無

論、昨日は酒を一滴も飲んでいないので、『酔ってここで寝た』というでもない。

考えつつも答えは出ず、ボリボリと頭を搔き……。

「悩んでてもしょうがねーな……」

自分の今の現状を確かめるため、銀時はベンチから立ち上がり、公園を後にする。

数十分ほど歩き回ったり、道行く人に尋ねたりした結果、いま自分の居る場所のことが大体分かった。

いま銀時が居る場所は、『東京』にある『台場』という所らしい。もちろん東京という場所には聞き覚えがないし、台場という場所も知らない。

しかも、「江戸へ行きたいんすけど、どのバスに乗ればいいでしょうかねー？」と訊くと、なぜか笑われたり、不審がられたりした。「んだよチクショー。俺が何したっつーんだよ。ただ帰り道を訊いてるだけなのによー」

海沿いの道に立つ街頭にもたれ、銀時は一人グチる。

「つーか、なんで俺はこんな見知らぬ土地にいんだ？ 実は俺は夢遊病だったとか？」

帰り方が分からない不満からか、銀時は頭をボリボリ搔きながら、ぶつぶつと独り言をつぶやき始める。

「それともアレか？ 本当は飲んでないと見せかけて、実は酒を飲んでて、知らぬ間にここに辿り着いたとかか？ あーくそ、やっぱ酒なんて飲むもんじゃねーな……」

「や、やめてください！」

「そうだなー。この際、きっぱりと酒は止めるべきだよなー」

「へへへ、いいじゃねーかよ。ちよつとくらい」

「うーん、そうだなー……。ちよつとくらいなら飲んでも……って、さっきから誰と喋ってんの俺？」

声がする方へ視線を向けると、少し離れた場所で3人の不良――

見た目ですぐに分かった。分かりやすいことにそいつらは、髪型はそれぞれ茶髪、モヒカン、スキンヘッド、服装もチャラチャラした絵に描いたような不良ルックだ。おまけに全員もれなく頭悪そうな顔をしている――が1人の少女を囲んでいた。

少女の方はどこかの学校の生徒なのかセーラー服姿で、しかも不思議なことにストレートヘアの髪も肌も真っ白で、瞳は血のように紅い。

「いいじゃねーか、少しぐらいお金貸してよー」

「俺達ゲーセンで使い切っちゃたんだよ。なあ、いいだろー？」

「わ、私、お金なんて持ってません！」

「ああん！？ 嘘つくんじゃねーよ！！ おまえその制服、武偵高のだろ！？ 武偵なら依頼とか請けてたんまり稼いでんだろが！！」

「……」

いまだに存在してたのか。あんなベタなカツアゲ……。

「しょーがねーなあ……」

やれやれといった様子で、銀時は不良達の下へ向かう。

言っておくが、銀時は普段から率先して人助けをするようなお人好しではない。

しかも、襲われているのは赤の他人だし、本来なら助ける義理も理由もない。

だが……目の前で困ってる人間を見捨てるほど、非情でもない。

「いいからさっさと――！！」

「おい」

「ん？」

突然声をかけられ、茶髪の不良が横を向く。

バキヤッ！！

「あべしっ！！？」

振り向いた不良の顎に、銀時は的確にアップercutを叩き込ん

だ！

アップパーを決められた茶髪は、派手に後方へ吹っ飛び、ズザザツと後頭部を擦りながら地面に倒れる。

「よ、よっちゃんああああん！！」

「んだてめええっ！！ 何者だコラアアアアアッ！！！」

仲間がやられたのを目の当たりにして、残りの2人が騒ぎ出す。白髪の少女も、突如現れた銀時を見て目をぱくりさせている。

「ぎゃーぎゃーぎゃーぎゃーやかましいんだよ。発情期ですかコノヤロー」

「てめえよくもよっちゃんをおっ！！」

「てめえコラ、ただじゃ帰さねえぞコラアッ！！」

「だからうるせーって。朝っぱらからベタなカツアゲしてんじゃねーよ。そんなに金が欲しいなら働け。それが嫌なら自販機の下から小銭でも発掘してパチンコでやってろ」

「んだとてめえっ！！ ふざけたことぬかしてんじゃねえぞ！！」

スキンヘッドの不良が、拳を振り上げて突っ込んできた――が、銀時はそれをあっさりかわし、さらにすれ違いざまに片足を前に出す。

「うおっ！！？」

足を引っ掛けられてバランスを崩し、スキンヘッドは地べたに顔を打ち付けて倒れる。

「てめっ！ よくも……ぶへっ！！？」

起き上がろうとしたスキンヘッドの後頭部を、思いっきり踏みつけてやる。

スキンヘッドは鼻血を垂らし、ピクピクと体を痙攣させて、そのまま気絶してしまう。

「てんめえっ！！ よっちゃんだけじゃなくなっちゃンまで！！」

次はモヒカン男が銀時目掛けて突っ込んできた。まったく学習能力がねーな……。

「10年――！！」

銀時は体に回転をかけつつ、その場で軽くジャンプし――。
「――はええんだよっ!!」

バキツツツ!!

「ひでぶっ!!?」

その回転の勢いのまま、回し蹴りの要領で、モヒカンの側頭部に踵^{かかと}をめり込ませる!

銀時が着地すると同時に、モヒカンも横になるように倒れた。

「カツアゲする前に、まず節約のしかたを覚えやがれバカヤロー」

「……あ、あの」

「ん?」

決めポーズとろうとしていた銀時に、白髪の少女が話しかけてきた。

「あ、ありがとうございます。おかげで助かりました……」

少女はぺこっと丁寧にお辞儀をしつつ、銀時にお礼を言う。

「あーいいって、いいって。銀さんちょうどストレス発散したかったしょー」

少女の礼に対して、銀時は何でも無さそうに言う。

……しかし、目の前にいる少女は見れば見るほど不思議な印象がした。

顔を立ちは整っていて、尚且つすべてが白く儚げだ。唯一色味のある紅い瞳がその白さを際立たせており、この世の者とは思えない美しさがあった。

「……? あの、どうしましたか?」

じっと見られ不思議に思ったのか、少女が首を傾げながら聞いてくる。

「え? ああ……気にすんな。それよりもああいうバカが多いから早く行った方が――」

パンッ！

突然、渴いた音が鳴り響く。

「……あ？」

時間が止まったような感覚と共に、銀時は腹の辺りに鈍い痛みを覚える。

下へ視線を落とすと――……腹部を中心に赤い染みが広がっていた。

「きゃあああああああああああああああああああああ
あッッ！！」

少女の悲鳴と同時に、時が動き出す。

銀時は血の広がる腹を押さえ、激痛のあまりその場に片ひざを着く。

「へっへっへ……っ！　ずいぶんとナメたまねしてくれたな！！」

声がした方を向くと、そこには銀時が最初に倒したはずの茶髪がいた。上体を起こして右手を突き出しており、その手に握られていたのは……一丁の拳銃だ。

どうやら銀時は、あの銃で撃たれたようだ。

「ここまでコケにされちゃ、もう生かして帰さねえ！　2人まとめてあの世に送ってやるよ！」

茶髪が立ち上がり、再び2人に向けて銃を構える。

「ちっ！」

銀時は腰に差してある木刀を抜き、そのままブーメランの要領で茶髪に向けて投げた。

「なにっ――……ふごっ！！？」

スカーン！と軽快な音を立てて、木刀は茶髪の顔面にヒットした。茶髪は鼻血を噴水のように出しながらその場にダウンし、同時に木刀もカラン！と音を立てて地面に落ちる。

「へへへ……。ざまーみやがれてんだ……」

そう言うと、銀時は糸が切れたようにその場に倒れこむ。

銀時の視界がぼやけ、出血のせいか全身に力が入らない。さらに先ほどまでの腹部の激痛も無くなっていた。

（ははは……。やべえな……。こんな見知らぬ土地で……。お陀仏とは……よ……）

もうろうとする意識の中、白髪の少女が何か叫んでいる光景を最後に――

――銀時の意識はそこで途切れた。

第二訓『春は番組編成が多いから気をつけろ!』（後書き）

銀時「おいおい! いきなり銀さんピンチなんだけど!!? 大丈夫なのこれ!?!」

蒼月「大丈夫です。だって主人公が死んだらお話になりませんもん」

神楽「ていうかワタシの出番、最初のほうだけアルか!?! もっと出せよコラ!」

新八「僕なんてレギュラーなのに一瞬たりとも出てないんですけど!?!」

蒼月「2人はアリアやキンジとポジションが被るから登場はずっと後の予定です」

2人『ふざけんなあああああっ!!!』

第三訓『きっかけなんてあってもなくても一緒』(前書き)

三話です。

遅筆で本当に申し訳ないです……。

第三訓『きっかけなんてあってもなくても一緒』

……。

……………。

(ん……?)

……真っ暗な闇に沈んでいた意識が、段々と浮かび上がってくる。

(一体……俺アはどうなったんだ?)

確か、自分は銃で撃たれたはずだ。

死んであの世に来たのかと思ったが、手足はもちろん、全身の感覚はある。

銀時はゆっくりとまぶたを開いた。最初はぼやけていたが、徐々に視界がハッキリしてくる。

——目の前には白い天井があった。

ふらつく頭を軽く振りながら、上体を起こす。

最初に目についたのは、自分の服装だった。寝ている間に着替えさせられたのか、銀時はパジャマのような病院着を着ていた。

さらに辺りを確認する。

銀時が今いるのは白く清潔な部屋——おそらくどこかの病院の病室だ。

部屋の中には四つのベットがあり、銀時はその内の一つを使っていた。

(なるほど……。どうやら俺は、どっかの病院に担ぎ込まれたみたいだな……)

考えながら、ボリボリと後頭部を掻く。

広い窓に視線を向けると、夕日が差し込んでおり、病室にある時計をみると午後7時位を指していた。

おそらく気を失ってから一日近く……。いや、それ以上経っている

かもしれない。

(……! そうだ、怪我……っ!)

銀時は慌てて腹部に視線を落とす。

服の前を開き、腹の辺りを見ると、そこにはぐるぐると包帯が巻かれていた。

恐る恐る、包帯の上から撃たれた場所に手を触れてみるが……。

(……? 痛くねエ……?)

擦ってもみるがやはり痛みはない。

違和感を覚え、腹部に巻かれた包帯を外してみる。

「……おいおい、どうなってんだ?」

外した包帯の下を見て、銀時は驚愕する。

撃たれたはずの場所には怪我どころか、傷痕すら無かった。まるで撃たれたのが嘘のようだ。

だが、撃たれたのは夢だった!——ということはないだろう。あの時の記憶はちゃんとある。

バアンツツツ!!

「!!?」

不思議に思っていると、突然、病室の扉が派手に開け放たれた。

それに驚き、銀時は扉の方へ視線を向ける。

扉をくぐって病室に入ってきたのは……床につきそうなほど長いポニーテールした大女だった。

さらに、なぜだかその女性は背中には2メートルはあろう長刀を何本も担いでおり、さらに腰には拳銃の入ったホルスターのを付けている。

(な……なんかテロリストが襲撃してきたアアア!!?)

入ってきた女性の第一印象を見て、銀時は心の中で叫ぶ。

「ようやくお目覚めみてえやな?」

そう言って女性は、鋭い目つきで銀時の方を見ると、傍へと近づ

いてきた。

「怪我はもう治ってんやろ？ お前に会いてえって言つとる御方がおる。ついてこいや」

「え？ なに、いきなり……？ ……あつ、もしかしてあなたこの病院の看護師さんかなにか？ すいません、奇抜な外見だったもので気づかな——いだだだだっ！！？」

いきなり髪を乱暴に掴まれ、銀時は苦痛の叫びを上げた。

「がたがたうっさいわ殺すぞ！ つべこべ言わず黙ってついてこいや！」

数秒で痺れを切らした女性は、髪を引っ張って銀時をベッドから引きずり下ろし、そのままずると通路の方へと引きずって行く。
「いでででっ！！ ちょっ……髪掴んだまま引きずるのやめて！！ハゲる、マジでハゲるって！ やめてえええええエエエエ！！」
抵抗も空しく、病院の通路に銀時の叫びが木霊した。



引きずられて数十分後……銀時は別の部屋に連れてこられた。

その部屋はさっきの病室とは雰囲気異なっていて、どこかの学校の校長室のような部屋だった。

部屋の中央に応接用のソファとセンターテーブルがあり、窓を背負う位置に校長先生が使ってそうなデスクがある……といった内装だ。

「オラッ！ さっさと入れや！」

そう言う女性性は、銀時を床の上に放り投げた。

ドサツと音を立てて床に落ちた銀時は、喚きながら頭を押さえ、床の上をのた打ち回る。

「いでででっ！！ ハゲた！！ これぜってーハゲたってっ！！」

「男のクセに喚くなや！ 校長、言われた通り連れてきたで」

「こ、校長だあ……？」

銀時は片手で頭を押さえながら体を起こし、デスクの方へ視線を向ける。

デスクの所に誰かいるようだが、座っている椅子の背もたれに夕日が当たって、ちょうどいい感じに影が出来ており、それに隠れて顔がよく分からない。

「ご苦労。だが、もう少し丁重に扱ってくれ蘭豹^{らんびょう}。彼は我が校の生徒を救ってくれた恩人なのだからな」

校長と呼ばれた人物は低く重い、威厳に満ちた声で言う。

さきほど蘭豹と呼ばれた女性は口ごもると、不機嫌そうに腕を組んで扉にもたれかかる。

「えーと、あんたがこの院長さん？ 患者に暴力ふるうなんざ、看護師にこういう教育してんだこの病院は」

と不満げに言う銀時。

「これはすまない。だが、残念ながらここは病院ではなく『東京武偵高校』だ。そして、彼女はここの教師だよ、『坂田銀時』くん？」

「！？」

見ず知らずの他人に名前を呼ばれ、銀時は驚く。

だが、その顔はすぐに真剣な表情へと変わる。

「なんで俺の名前を……？」

「失礼ながら、身元確認の為に中身を拝見させてもらった」

校長はデスクの引き出しからなにかを取り出し、銀時に見えるように持ち上げた。

その手に持っていたのは、銀時の財布だった。恐らく中に入っている運転免許証から名前を特定したのだろう。

「返そう」

校長は手首を軽く振って財布を投げ、銀時はそれを片手で器用にキャッチする。

「なんで寺子屋の中に病院があるとか、教師が武装してるとか、聞

きてー事は山ほどあるが……」

銀時が頭をかきながら言う。

「まずは俺をここに連れてきた理由を教えてくださいな？ わざわざ財布返す為だけに呼んだんじゃない？」

返された財布をひらひらと振って見せながら、銀時は校長に聞く。
「察しが良くて助かる。その通り、キミをここ連れてきてもらった理由はいくつかある」

改まった様子で、校長は口を開く。

「ひとつ、まずは礼を言わせてもらいたい。我が校の生徒を救ってくれて感謝する」

「生徒？」

その言葉を聞いて、銀時はあの白髪の少女を思い出す。

「そうだ！ あいつはどうなった!？」

「心配する必要はない。その生徒はキミのおかげで傷一つないよ。まあ、逆に助けたキミの方が重症で、ここに連絡してなければ危なかったがね」

「そうか……」

少女の無事を聞いて、銀時が安堵する。

だが、校長はそんな事はお構いなしに話を続ける。

「そして、もうひとつ。キミは、銃を持った男3人を一瞬で倒したと聞いた。そんなキミの腕を見込んでお願いがある」

「お願い？」

「キミにこの東京武偵高校で教師をしてもらいたい」

校長の言葉に銀時は首を傾げ、蘭豹は驚いたように目を見開く。

「そりゃどういう……?」

「おい、校長……!!」

銀時と蘭豹が同時に口を開くが、校長は片手を上げてそれを制す。
「この学校は、『武偵』と呼ばれる特殊な資格を持つ者を育てる場所だね。教師はそれなりの場数を踏んだ実力者が相応しいのだが、そういった人材が今は不足している」

「だから、俺をスカウトしたいってか？」

だるそうに言いながら、銀時はボリボリと頭をかく。

「わりのが、俺アは一刻も早く江戸に帰らねえといけねーんな。そんな事してる暇はねーよ」

「「エド？」」

銀時の言葉を聞いて、校長と蘭豹は眉をひそめる。

「エド……というと、幕末の『江戸』のことかね？」

「ん？ そーだけど？ 日本の首都だろ？」

当然のように言う銀時。

しかし、校長はますます眉をひそめる。

「なにを言っているんだね？ 今の日本の首都はここ『東京』だ。

『江戸』が首都だったのは百年以上も昔の話だ」

「え……？ ひゃくねん……？」

その言葉に、銀時は耳を疑う。

そして、嫌な予感がしたが恐る恐る尋ねる。

「えーと……。一応聞くけど、今は西暦何年で……？」

「？ 今は西暦2000年だが、それがどうかしたのかね？」

さきほどの銀時と同じように、当然のように言う校長。

しかし、その言葉に銀時は愕然とする。

（に……2000年！？ え！？ どーいうこと、コレ！？ マジで百年以上後の未来！？

寝て目が覚めたら見知らぬ土地にいたり、銃で撃たただけでも散々だってエのに……まさかのタイムスリップウウウウ！！？）

あまりに常識離れた今の状況に思考が追いつかず、銀時は驚愕した表情のまま固まってしまう。

「……よく分からないが、どうやら今のキミは行く当てが無いようだな」

校長が話しかけられ、銀時は我に返る。

「どうだい？ この学校の教務に就いてくれるというのなら、条件として必要最低限の生活は保障するが？」

「……」

その話を聞いて銀時は考える。

ここが本当に『未来の世界』なのかどうかは、まだ疑問が残る。

だが、ここが見知らぬ土地で帰り方が分からないのは事実だ。

得体の知れない学校の教師になるのは少しアレだが、校長の言う通り、今の銀時には行く当てがない……。

「仕方ねーか……」

腹が決まり、銀時は軽く溜め息をつく。

「わーった。なってやるよ、その武偵高校とやらの教師にな」

——こうして、銀時は東京武偵高校の教師となった。

第三訓『きっかけなんてあってもなくても一緒』（後書き）

銀時 「なんか展開がグダグダだな、おい」

蒼月 「すみません。説明的な文章を書くのが苦手で……」

蒼月 「とりあえず次回は銀時（銀八）がキンジ、アリアと出会おうシンです！」

第四訓『第一印象が悪い奴はいい奴が多い! ……と思いたいよね』(前書き)

第四話です!

今回は時間があつたので、早めに投稿できました!

まあ、普通の人はこれくらいのペースが当たり前でしょうけど……

(泣)

とりあえず、今回はチャリジャック編です!

第四訓『第一印象が悪い奴はいい奴が多い！ ……と思いたいよね』

——チュン！ チュン！

「う……うん……？」

鳥のさえずりと、窓から入る朝日で目を覚ます。

なんかこの小説、目覚めから始まるパターン多くね？ とか思いつつ、トランクスにランニング姿で寝ていた銀時は、布団から体を起こす。

いま銀時がいる部屋は、『必要最低限の生活保障』の一部として校長から与えられた、学園島にある安アパートの一室だ。

現在、銀時はこの部屋で生活をしている。

そして、スカウトされたあの日からすでに10日経っている。

銀時はぼんやりする頭で、その間の事を思い返してみた。

この10日間、銀時は『武偵』や『東京武偵高校』について詳細を聞かされたり、教師になるに当たって様々な手続きをしたりなど、何かと忙しい日々だった。

だが銀時はその合間を縫って、『この世界』の事についても可能な限り調べていた。

その結果、確かにここは校長が言ったとおり、銀時がいた時代から百年以上後の『未来の世界』のようだ。

……が、歴史の内容におかしな点がいくつかあった。

歴史の本に、どこかで見たような人物や組織の名前がちらほら書いてあるのだが、その名前が微妙に違ったりしているのだ。

まあ……百年も経っているのだから名前が間違っただけで伝わっているのはおかしいことではない。現に銀時の知り合いには平気で名前を間違える奴がいるし……。

だが、決定的に違うことが一つ。

それは……『天人』^{あまんと}が襲来したという記録がどこにも無かったことだ。

天人——天から突如として舞い降り、未知のオーバーテクノロジーによって江戸を開国させた異星人達。

銀時がいた時代……いや世界では、その天人の襲来によって幕府が傀儡となり、攘夷戦争が起こったという大事件があった。

だが、この世界の歴史の本には、そのような出来事はどこにも載っていない。載っているのは『ペリーが黒船で来航した』くらいだ。一つだけあった大きな違い。

本当にここは……『銀時がいた世界』の『未来の世界』なのだろうか？

「まあ、考えてもしかたねーか」

頭をボリボリかきながら、銀時は回想を打ち切る。

歴史が違っていることは気になるが、いまはなんの情報も無いのだから答えは出ない。

それに帰り方が分からない以上、しばらくはこの世界で暮らさなければならぬのだから、その内分かる時が来るだろう。

気を取り直して、銀時は時計を見る。

今日は東京武偵高校——もと武偵高の始業式であり、銀時の教師としての初出勤日だ。よって遅刻など絶対に許されない。

ちなみに職員朝礼は8時からである。

現在の時刻は——7時55分。

……。

「遅刻だァァァァァァァァァァ！」

銀時の叫びが部屋の中で木霊した。



ブロロロッ!!

排気音と共に、武偵高へ向かう道を一台の原付ベスバが走り抜けた。

その原付にまたがっているのは、支給された伊達眼鏡と白衣——ちなみに両方とも防弾性だ——を身に着けた銀時だ。

「……ったく! 初日から遅刻とか冗談じゃねーぞ!」

愚痴りながら、銀時は法定速度ギリギリで原付を走らせる。

ちなみにこの原付は、銀時が校長に頼み込んで特別に支給してもらった物だ。

「まあ、交通手段は必要だな……」ということで向こうも了承してくれた。

なんでも元々は生徒からの没収品らしく、スピードが出るよう違法スレスレの改造が施されている物らしい。

が、いくらスピードを出しても職員朝礼には間に合わないのは明白だ。

最悪、始業式の準備にまで遅刻したら本当にマズイ。あの蘭豹とかいう雌ゴリラに殺される。

「くっそー! なんで寝坊しちゃったんだ俺!? やっぱ昨日のアレか!? ラピユタ最後まで観たからか!?」

そう。昨日の夜中に、テレビで名作アニメ映画であるラピユタが放送されていたのだ。

元の世界でもあったこの映画を、銀時はラストまで観た。恐らくそれが原因で寝坊してしまったのだろう。

「やっぱいい歳こいてアニメなんて観るもんじゃねーなオイ! あ、でもジブリは大人にこそみてほしい映画だしな。ラピユタが天空に昇っていくシーンはいつみても泣けるし……」

などと言っていると、気がつけば銀時はすでに武偵高の敷地内に

入っていた。

この道をもう少し走れば、始業式が行われる体育館が見えてくるはずだ。

「うし、なんとか間に合いそー」

「なっ……何だ！ 何のイタズラだっ！」

「？」

突然、叫び声が聞こえ、銀時は辺りを見回す。

前方を見ると、必死になって自転車をこいでいる少年がいた。武偵高の男子制服を着ているので、恐らく武偵高の生徒だろう。

銀時は気になったので近づき、自転車と並行するように原付を走らせ、少年に声をかける。

「おいおい、どーしたお前？ あ、もしかしてお前も遅刻しそうとか？ いやいや、お互い災難だねー」

「そんなのん気な状況かッ！！ こ、これ！ これ見てくれ！」

ただならぬ様子で叫び、少年は自身のすぐ傍を指差す。

少年が指差した先——銀時から見て少年を挟んで反対側に、銀時と同じく少年に併走する『それ』はあった。

『それ』はタイヤを二つ平行に並べて、ハンドルをつけた乗り物……たしか『セグウェイ』というやつだ。

そのセグウェイには人が乗っておらず、代わりにスピーカーと一基の自動銃座——銀時は知らないが、それはイスラエルIMI社製の、UZ-I^{サブマシンガン}と呼ばれる短機関銃だ——が載っていた。

しかも、銃口は自転車をこぐ少年へと向けられている。

「えーと……なにコレ？ どういう状況？ アレか？ お前、その妙なもんに命を狙われてるとか？」

「分かったなら離れろ！ 巻き込まれるぞ！」

緊張感もなく質問する銀時に対し、少年が声を張り上げる。

どうやらこの少年は、セグウェイによって自転車の行動を占拠されてしまっているようだ。

ハイジャックやバスジャックならぬ、チャリジャックと言ったと

ころだろうか？

だが、銀時はやはり緊張感皆無と言った様子で、少年に話しかける。

「いや、すごいなチャリジャックとか。メツチャ斬新じゃん。明日、新聞にお前の名前が載るよ、きっと」

「何をのん気こと言ってるんだ！！ このままじゃ新聞に載ったとしても死人として載ることになる！！」

「おいおい、チャリジャックくらいで弱音吐くんじゃねーよ。つーか、お前武偵だろ？ 撃たれる前にそれ壊すとか、チャリから降りるとかすりゃいいじゃねーか」

「それが出来たら苦労しない！ このチャリには……！」

「そのチャリには爆弾が仕掛けてあります」

少年の代わりに、セグウェイに載ったスピーカーから答えが返ってくる。

スピーカーから出る声は、切って繋がったような機械的な声だ。これはネットで人気のアレ……ハツネなんとかっていうボーカロイド。それで作ったらしい人口音声のようだ。

「爆弾？」と眉をひそめる銀時。

「そうなんだ！ サドルの裏に爆弾が……っ！ しかもチャリどころか、自動車も吹っ飛ばせそうなサイズだ！」

少年の言葉でようやく事の重大さが理解できたのか、サーツと銀時の顔が青ざめる。

「ば……バツカ、慌てるんじゃねーよ。ケツの下に爆弾があるくらいで……。筆者や漫画家の皆さんを見ろ。みんな痔と戦ってるんだよ？ 常にケツに爆弾抱えてるよーなもんだよ？」

「なんの話だアアアアアアアアアア……！」

平然を装いつつボケる銀時に、少年が盛大にツッコみを入れる。

「だいたいよお……そんな危ねーモンが付いてるなら、尚のことチャリから降りればいいじゃねーか」

「ダメだ！ 降りたり減速したりすると爆発するみたいなんだ！」

「じゃあ……携帯とかで、爆弾処理できる奴に助けを求めるとか……」

「携帯を使っても爆発するんだよ！」

銀時が解決策を提示するが、少年が言うにどんな行動を取っても爆発するようだ。まさに八方塞の状態である。

「……終わったなそりゃ。でも大丈夫、一瞬だろうーが100年だろーがよオ。一生懸命生きた奴の人生に価値の違いなんて無いと思う。オケラだってアメンボだって……」

「こんなチャリの上で何を一生懸命やるんだよツツツ!!?」

あきらめムードな銀時に向かって、少年が叫ぶ。

すると銀時は、「じゃあ……」と言いつつ少年の方を向く。

「もうちょっと一生懸命、自転車こいでろ。いま爆弾処理できそうな奴を呼んでくるからよ」

「――!? あ、ああ、頼む！」

その手があった。携帯で助けを呼べないなら、他人に頼めばいいのだ。

少年は内心でガッツポーズを取る。

原付を加速させるため、銀時はアクセルを回そうとするが……。

ガチャ！

（かちゃ……?）

不審な音が聞こえ、銀時はその方向へと顔を向ける。

そこにはなぜか、先ほどまで少年と併走していたはずのセグウェイがあった。

今、セグウェイは銀時に併走しており、さらに銃口を向けていた。「あれ？ なにコレ？ なんかこいつ俺のこと狙ってない？」とだらだら冷や汗を流しながら言う銀時。

「一定 時間 以上、爆弾 の 傍にいたので、ターゲットに指定しやがります。爆弾 から 一定 距離 以上 離れ やがります」

すと 撃ち殺 しゃがります」

スピーカーから流れる機械的で無慈悲な声に、サーッと顔色を失くす銀時と少年。

「オイイイイイイ！！　なんか俺まで標的にされたぞ！！？　どーすんだこれ！？」

「知るか！　そもそもお前がくだらないこと喋ってるからだろ！？」
状況は悪化。

銀時は少年を助けるどころか、自分までピンチに陥ってしまった。
「とにかく、万が一に備えて人気ひとけのない場所に！　もしこんな場所で爆発したら巻き添えが出る！」

「ちっ！　しょうがねエ！！」

少年の指示に従い、体育館への道を外れる自転車の後を、銀時は原付で追いかける。

離れすぎるとセグウェイが発砲してくるらしいので、付かず離れずの距離を保ちながら、自転車と併走するようにしつつ、後を追う。

しばらく走ると、金網に囲まれた広い場所——おそらくグラウンドと思わしき場所が見えてくる。

金網越しに見えるグラウンドには誰もいない。

（ここなら大丈夫なんじゃねーか！？）

同じ事を考えたのか、少年はグラウンドの入口に向かって自転車をこぐ。

銀時もそれを追って、原付を走らせる。

セグウェイの方を見ると、相変わらず銃口を向けつつ、2人に併走してくる。

（おかしいい！　絶対おかしい！！　遅刻しそうになっただけだぞ、俺は！　なのに、なにをどうしたらこうなるんだアア！？　やっぱラピユタか！？　ラピユタ最後まで見たからか！！！？）

命の危機を前に、心の中で叫ぶ銀時。

このままでは自転車の爆発に巻き込まれて、自分も少年もお陀仏

だ。

かといって、離れればセグウェイに射殺される。

「!？」

そんな極限の状況下の中で、銀時と少年はありえないものを目にする。

グラウンド近くのマンション。その屋上の縁に、一人の少女が立っていた。

武偵高のセーラー服を身にまとい、長い、ピンクのツインテールを風に揺らしている。

不意に少女は、マンションの屋上から飛び降りた。

そして、滑空準備させてあったらしいパラグライダーが、少女の頭上に広がった。

「おいおい、なんだありゃ……？」

その光景を見て、銀時は呆気にとられ、少年は目を丸くしている。さらに、少女はツインテールをなびかせながら、こちらへと降下してきた。

「バツ、バカ！ 来るな！ この自転車には爆弾が――」

少年が叫ぶが、パラグライダーの降下スピードは意外にも早い。

多分、少女には聞こえていないだろう。

少女はぶらんぶらんと体を揺らしながら、左右の太ももにつけていたホルスターから、それぞれ大型拳銃を抜いた。片方は銀色、もう片方は黒色の二丁拳銃だ。

「ほらそのバカ2人！ さっさと頭を下げなさいよ！」

バリバリバリッ！

2人が頭を下げるより先に、少女はセグウェイに弾丸の雨を浴びせる。

驚くことに、少女の撃った弾丸は次々とセグウェイに命中し、反撃する暇もないまま、セグウェイはバラバラに大破した。

「おいおい、なんつー腕だ……！」

少女の射撃の腕前に、銀時は純粹に驚く。

無理もない。10 m 以上も離れているセグウェイを拳銃で破壊するなど、普通では不可能に近い芸当なのだから。

少女はくるくると回しながら二丁拳銃をホルスターを収めると、体を揺らしてパラグライダーを上手く操り、少年の頭上へと飛んできた。

その少女から逃げるように、少年は入口からグラウンドに入り、銀時もありゆきで後を追う。

「く、来るなって言ってんだろ！ この自転車には爆薬が仕掛けられてる！ 減速すると爆発するんだ！ お、お前も巻き込まれるぞ！」

「つーかお前何者！？ 空から飛んでくるとかどこの空賊！？」

「バカッ！」

銀時と少年が喚いていると、少女は白いスニーカー履いた足で、少年の脳天を踏みつける。

（うお……。あれは痛えな……）

その光景を見て、銀時は口を閉ざす。口は災いの門だ。

「武偵憲章1条にあるでしょ！ 『仲間を信じ、仲間を助けよ』——いくわよ！」

少女は気流をとらえてパラグライダーを上昇させる。その後、グラウンドへ斜めに急降下しつつ、こちらにUターンしてきた。

そして、なぜか少女はぶらんと逆さ吊りの状態になり、そのままの凄いスピードで少年の方へとまっすぐ飛ぶ。

しかも都合上、少年は少女に向かって自転車を走らせる形になっている。

（ん？ なんかこんなシーン、最近見たな……）
妙なデジャヴ。

銀時はあごに手を当てて考える。

そうだ。昨日見たラピュタにこんなシーンがあった。

燃え盛る要塞の屋上の縁に立つヒロインを、主人公の少年が助けるシーン。

その時、少年は虫のような小型飛行船から逆さ吊りの体勢になって、抱き寄せるようにヒロインを回収するのだ。

（あれ？ でも、これじゃ男と女の位置が逆じゃね？）

とかのん気に思っていると、銀時は少女の意図に気づく。

そう、『少女がそれを再現しようとしている』ことに……。

銀時の顔が青ざめる。

「――マジかよ……！」

少年も気づいたのか、銀時と同じように顔を青くする。

「ほらバカっ！ 全力でこぐっ！ 原付に乗ったあんたもっ！ 早く離れなさいっ！」

2人に命令しながら、パズ……少女は逆さ吊りのまま両手を広げる。

「おんまえ、バカかあああああああッ……！」

銀時は叫びながら、ハンドルを横にきり、命一杯アクセルをぶん回す！

自転車から離れるべく、2人に背を向け、とにかく原付のスピードを上げる！

あの2人が今どういう状態か確認する暇は無い！ いや、見なくてもどんな状態か大体は想像つくし！

直後――。

ドガアアアアアアアアアアアアアッツツ……！！

銀時の背後で巨大な閃光と轟音、そして爆風。

おそらく……いや、間違いなく少年の自転車が爆発したのだろう。熱風を背中に受けて、銀時は原付ごと吹っ飛ばされた。

原付から投げ出され、逆さまの状態で宙を舞う銀時の視界に、抱き合ってる形のまま、同じように吹っ飛ばされた少年と少女が見えた。

桜の木にパラグライダーをもぎ取られ、2人はそのままグラウン

ドの片隅にある体育倉庫らしき建物に突っ込んだ。

銀時は背中から地面に激突し、ごろごろと2、3回ほど前転した後、そのまま仰向けでグラウンドに倒れる。

数秒遅れで、ガシャン！ と少し離れた場所に原付が落ちた。壊れてはいないようだが、タイヤが空しくカラカラ……と空回りしている。

仰向けのまま、銀時は首を上げ、逆さまの視界で先ほど自転車があった場所からもうもうと上がる黒い煙を見る。

「なんでこーなった？ やっぱラピユタか？ ラピユタ最後まで見たからか？」

銀時の呟きは、煙と共に空しく朝の青空へと昇っていった。

第四訓『第一印象が悪い奴はいい奴が多い! ……と思いたいよね』(後書き)

蒼月「ちゃんと予告通り、銀さんとアリアとキンジが出会ったでしよ?」

銀時「確かに出会ってるちゃ、出会ってるけどよ……」

アリア「なんで私とキンジの名前が出てないわけ?」

キンジ「常に少年、少女だしな」

蒼月「そ、それは次回を盛り上げるための演出ですよ!」

3人『本当は?』

蒼月「入りきりませんでした……。すみません……」

第五訓 『最初が肝心だから自己紹介は多少背伸びして三割増しで話せ』

(前書き)

ようやく更新できましたー！ 一ヶ月ぶりだし、文章長っ！！

後、遅ればせながら銀魂アニメ再開&緋弾のアリア アニメ放送開始おめでとう！

待っていた皆さん、本当に申し訳ありません！！

第五訓『最初が肝心だから自己紹介は多少背伸びして三割増しで話せ』

「あー……。ひでー目にあった……」

倒れている原付を起こしながら、銀時がぼやく。

なんだか最近是不運に見舞われてばかりだ。どっかの推理漫画の主人公みたく、死神的なものが憑いてるんじゃないかと思えてくる。それよりもさっきの爆発音や、今上がっている黒煙を見てすぐにも人が集まってくるだろう。

見つかったら事情聴取だのなんだのと面倒なことになりそうだ。

さっさとグラウンドを去ろうする銀時だが……。

ズガガガガッ！！　ズガガガガンッ！！

「んだよ、今度は……？」

突然、轟音が聞こえ、銀時はその方向を向く。

視線の先にあったのは……さっきのセグウェイだ。しかも7台もいる。

「！？　おいおい！　まだいやがったのかよ！？」

さらに、セグウェイ達は先ほど少年と少女が突っ込んだ体育倉庫に銃弾を乱射している。

武偵高では制服だけでなく、施設や備品まで防弾性で出来ているらしいが、あのままでは中にいる2人が危険だろう。

銀時は原付を放り出し、2人を助けるべく体育倉庫へ向かおうとするが――

ガチャチャッ！！

背後からどこかで聞いたような不吉な音が聞こえ、銀時は足を止める。

後ろを振り向くと、そこには別のセグウェイが3台並んでおり、しかもUZIの銃口を銀時へと向けている。

「いやゝホント……。憑いてるなゝ俺って……」

口元をヒクつかせ、苦笑いを浮かべて言う銀時に……。

——ズガガガガガッ!!

3台のセグウェイが一齐に銃弾を撃ってきた。

……が、銀時は大きく真横へ跳んでそれをかわし、外れた弾丸は先ほどまで銀時がいた場所に無数の穴を穿つ。

銃撃を回避した銀時は、地面を転がるようにして受け身を取り、体勢を立て直しつつ腰に差してある木刀を抜く。

そして、頭から突っ込むようにして、セグウェイ達の方へと駆ける!

向かってきた銀時に、セグウェイ達は再び銃口を向けるが……。

「遅えええええッ!!」

叫びながら銀時は、ハンドルの銃座を狙って、木刀を水平に薙ぐ!

——一閃。

銀時は木刀による一太刀で、セグウェイ達の銃座を全て両断した。

銃座を破壊され、動かなくなったセグウェイ達を見回しながら、

銀時は木刀を腰に戻す。

「さてと、次はあいつらだな。やられちゃいねーだろーな?」

銀時が体育倉庫に視線を戻すと、変わらずセグウェイ達による銃撃は続いていた。

今度こそ2人を助けるべく、銀時は体育倉庫に向かって走り出そうと……しなかった。

なぜなら、体育倉庫から人影が出てくるのが見えたからだ。

その人影は……さっきチャリジャックされていた少年だった。片手には一丁の自動拳銃——ベレッタ社製のM92F。もちろん、銀時は知らない——を握っている。

(おいおい、なにやってんだアイツ!? 銃を向けられてんのに、

なにをぼーっと突っ立ってんだ!?)

そう銀時が思ったのも束の間、7台のセグウェイ達は少年の頭部を狙って一斉にU^{ウー}Z^{ジー}Iを撃った!

間違いなく少年の頭は吹き飛んだと思えた――が、なんと少年は上体を後ろに大きく反らし、銃弾を全て避け、同時に片手に持ったベレッタを左から右へ薙ぎ、セグウェイ達へと応射する。

ズガガガガガガンッ!!

少年の撃った銃弾により、全てのセグウェイは、その銃座のU^{ウー}Z^{ジー}Iを吹き飛ばされた。

――さっき少年が撃った弾数は7発。

つまり、あの少年は1台つきたった1発の弾丸で、セグウェイ達の銃座を全て吹き飛ばしたのだ。

セグウェイ達が全て停止したのを確認して、少年は体育倉庫へと戻っていく。

その光景を遠くから見ていた銀時は……。

「なんか、大丈夫そーだね……」

そう、ぽつりと呟くと、銀時は倒れている原付を起こして乗り、今度こそグラウンドを後にする。

ちなみに体育倉庫の方からまた発砲音が聞こえた気がしたが――気にしないことにした。

なぜか分からないが、これは気にしなくても大丈夫だと思った。



その後、銀時は何とか教務科^{マスターズ}までたどり着いていた。

「心配しましたよ坂田先生」。時間になってもいらっしやらないの

で、何かあったのかと」

銀時の前に立つ女性――高天原たかまがはら ゆとりが、のんびりした口調で言う。

彼女は銀時が副担任となるクラスの担任であり、銀時の指導係でもある女性教師だ。

「ところで……何かあったんですか？」

高天原先生は、なぜか顔や白衣の所々に泥や煤すすを付けている銀時に質問する。

その質問に対して銀時は……。

「いえ、なにも……。朝のロッケ作りに失敗しました」

と適当にごまかす。無闇に今朝の爆破事件のことを話すと事情を説明しなければならぬのでめんどくさいと思ったからだ。

高天原先生は「そ、そうですか……？」と腑に落ちない様子だったが、なんとか納得してくれた。

「ところで……なんか今日は人が少なくないですか？」

教務科の中を見回しながら銀時が言う。

妙な事件に巻き込まれたとは言え、職員朝礼&始業式に完全に遅刻してしまったので、銀時は蘭豹らんびょうや他のテロリスト……もとい教師達に殺されるのを覚悟していた。

だが、教師達の詰め所であるはず教務科には、（物騒な）教師達の姿が見えない。

全員、自分の受け持つクラスへ行ったのかとも思ったが、時間的にはまだ早い。

「ああ、なぜか皆さん今日は遅れてくるみたいなんですよ。綴つづ先生にいたっては欠勤してますし……」

「そりゃまた……」

「なんで？」と銀時が続けようとした時、教務科の扉がガラガラと開かれた。

「おはようさーん……」

入ってきたのは蘭豹だった。なぜか気分が悪そうでふらふらして

おり、目の下にはくまを作っている。

「おーおー、遅い出勤だなコノヤロー？　なんかあったか？」

銀時はニヤつきながら、蘭豹に遅れてきた理由を聞いた。自分の事を棚に上げて。

声をかけられた蘭豹は、顔を背けながら答えた。

「なんでもあらへんわ。ただ空賊の頭が最高だっただけや……」

「え？　なに？　おまえも見たの？　ラピユタ見ちゃった？」

銀時の言葉を見無視して、蘭豹は自分の机に向かい、椅子に座るとそのまま机に突っ伏して寝てしまう。

「……」

蘭豹の早寝を見て呆気にとられる2人だが、高天原先生が先に口を開いた。

「そ、それじゃあ教室に向かいましょうか」

「そ、そうっすね」

ちなみに後で分かったのだが、どうやら銀時も含め、ほとんどの教師達の遅れた理由がラピユタだったらしい……。



（ちくしょう……朝から酷い目にあつた……）

2年A組の教室。そこで黒髪の少年——遠山^{とおやま}　キンジは机に突っ

伏しながら、心の中でぼやく。

「どうしたキンジ？　なんか疲れてるみたいだな？」

右隣に座る身長190はあるツンツン頭の男——武藤^{むとう}　剛氣^{こうき}が話しかけてきた。

キンジの一年の頃からの知り合いである車輛科^{ロジ}の生徒で、乗り物と名のつくものなら何でも運転できるという特技を持っている。

「いや、今朝ちょっとな……」

言い難そうに答えるキンジだが、実際は『ちょっと』どころの話ではない。

自転車に爆弾を仕掛けられて爆殺されかけ、しかも変な白衣の男にからまれたり、凶暴女に危うく撃ち殺されかけたりと、朝から散々な目にあつたのだ。

キンジの雰囲気で何か察したのか、武藤は「なんか大変みたいだな……」と同情の言葉をかける。

「そういや知ってるかキンジ？ 今日、うちのクラスに新任の先生が来るらしいぞ？」

「先生？」

武藤が新たに出した話題に、キンジが聞き返す。

「あ！ 理子知ってるー！ なんでも、校長が直々にスカウトしてきた人なんだってー！」

武藤の代わりに答えたのは、ゆるい天然パーマの長い金髪をツーサイドアップにした少女――峰^{みねりこ} 理子だ。

キンジと同じ探偵科^{インクスタ}の生徒だが、探偵科ナンバーワンのバカで、武偵高の制服をヒラヒラなフリルだらけ――確かローリタ・ファッションとかいうらしい――に魔改造している。

「校長が直々に……なあ……」

「ああっ！ キーくん胡散臭そうな顔してるー！ ホントだぞおー！ 理子、ちゃんと調べたんだからー！」

キンジの態度に不満を持ったのか、理子は頬を膨らませる。

だが、キンジは理子の情報を信用していない訳ではない。理子はこんなバカだが、情報収集能力に優れ、信憑性の高い情報を集める探偵科の優等生だ。

問題なのは、この学校の校長自体が胡散臭いのだ。

東京武偵高校の校長を務める位なのだから凄腕の武偵なのだろうが、銃を瞬時に抜くためという名目で女子制服をミニスカにしたり、武偵高のイメージアップの為に女子生徒にチアリーディングやマーチングバンドをさせたりしている。

当然、そんな校長がスカウトする人物なのだから胡散臭いに決まっている。

そもそも、武偵高にまともな教師自体少ないのだから、尚のこと期待できない。

「おいおい、キンジ。もう少し嬉しそうにしろよ。もしかしたら、すげー美人な先生かもしれないだろ？」

「いやいや武藤くん。ここカッコイイ美形な先生ってパターンに決まってますよー？」

「いや、美人先生の方が夢があるだろー？」

などと議論している武藤と理子だが、キンジはある疑問を抱く。

「？　ちよっと待て。新任の先生なら、始業式で紹介されるはずじゃないか？」

「ん？　あー……なんか知らんが、校長が遅れて来るみたいなこと言ってたぞ？　キンジは始業式に出てないから知らんだろうが、蘭豹も含めて先生の大半が遅れてきてるらしい」

「へえ……」とキンジ。

（あのテロリスト集団が遅れるなんて珍しいこともあるもんだな）
キンジがそう思っていると、教室の前の黒板の扉がガラガラと開く。

「はあーい、皆さん静かにー。ホームルームを始めますよー」

そう言って入ってきたのは、探偵科の教諭である高天原先生だ。

この危険人物ばかりが教師を務める武偵高で、数少ないまともな人物で『武偵高の良心』と呼ばれている先生だ。

自身のクラスの担任がまともな教師と分かり、キンジのみならず他のクラスメイトも安堵する。

「うふふ。じゃあまずは今日からこのクラスの副担任になるカッコイイ先生に自己紹介してもらっちゃいますよー」

と嬉しそうに前置きする高天原先生。カッコイイと表現することから、新任教師は男性のようだ。

武藤は少し残念そうにしており、理子は「フラグ立ったー！」と

小声で喜んでいる。

期待が入り混じった視線で、クラスの全員が、扉の方を見る。そこから入ってきた人物を見て……。

キンジは椅子からずり落ちそうになる。

安物らしきスリッパをぺったぺったと鳴らして教室に入ってきたその男性は、キンジの見覚えのある人物だった。

天然パーマの銀髪、理科の教師が着るような白衣、緩んだネクタイ、口にくわえた煙草（？）、そして眼鏡から覗く死んだ魚のような気の抜けた眼。

見間違えるはずもない……今朝の白衣の男だ！

キンジは絶句する。

その白衣の男は教壇に上がると、正面を向き、口を開いた。

「どーも、今日からこのクラスの副担任になった坂田 銀八ぎんぱちでーす。担当教科は国語、趣味は糖分摂取、特技は目エ開けたまま寝れる事です」

銀時——もとい、銀八がけだるげに自己紹介をする。

ちなみに銀時がさっき名乗った名前だが、本人が「3年B組の担任みたいでかつこよくね？」という理由から、本名ではなく『坂田 銀八』という名で学校側に登録している。無論、深い意味はなく本人の気まぐれである。なので、以降は銀時のことは銀八と呼ぶこととする。

銀八の自己紹介を終えると、クラスの生徒達は全員、少し沈黙した後、わーっ！ 一斉と歓声を上げた。

どうやら銀八の風貌は、このクラスの面々のお気に召した様で、ほとんどの生徒がなにやら嬉しそうにしている。

「銀八先生は教育実習生として1年間、皆さんに授業を教えることになります。皆さん、仲良くしてくださいねー」

『はい！』

クラス全員が声を揃えて言うのと、そのままぱちぱちと大きく拍手

をする。

「じゃあ次は去年の3学期に転入してきたカーワイイ子から自己紹介してもらいますよー」

銀八の時と同じように、高天原先生が再び前置きする。

自分の席から立ち上がった1人の生徒が、教壇に近づいてきた。

その生徒を見て、銀時は驚く。

「!? おまえは……!」

見覚えのあるピンクのツインテールを揺らす背の低いその女生徒は、今朝、銀八と少年を救ったあの少女だった。

だが少女の方は覚えていないのか、銀八を無視して教壇へと上がり、いきなり『ある方向』を指差す。

「先生、あたしはアイツの隣に座りたい」

予想外の発言に、銀八や高天原先生も含めてクラス全員が一瞬だけ絶句し、それから一斉に少女が指差す方へと視線を向ける。

少女が指差す席に座る1人の男子生徒、その人物も銀八の見覚えのある人物だった。

今朝、自分と共に助けられ、7台のセグウェイを簡単に破壊していた少年だ。

わーっ! と、再び生徒達が歓声を上げる。

そりゃそうだ。新学期早々に女子が男子の「隣に座りたい」なんざ、「告白」してるのほとんど同意義だ。歓声だって上がるだろう。

歓声の中、少年は椅子から転げ落ちる。

「な、なんでだよ……!」

少年がそう呟いた気がしたが、クラスの歓声のせいでうまく聞き取れない。

「よ……良かったキンジ! なんか知らんがお前にも春が来たみたいだぞ! 先生! オレ、転入生さんと席代わりますよ!」

右隣に座っていた大男が、少年——キンジの手を握ってブンブン振りながら、満面の笑みで席を立った。

「あらあら。最近の女子高生は積極的ねえー。じゃあ武藤くん。席を代わってあげて」

高天原先生は嬉しそうにしながら武藤という男子生徒の提案をOKする。

「違……っ！」

「キンジ、これ。さっきのベルト」

慌てて立ち上がったキンジだが、転入生がその言葉を遮り、1本のベルトを投げ渡す。

キンジがそのベルトをキャッチすると――。

「理子分かった！ 分かっちゃった！ ――これ、フラグばっきばきに立ってるよ！」

キンジの左隣に座っていた、自身を理子と呼ぶ女生徒が、ガタン！と席から立つ。

「キーくん、ベルトしてない！ そしてそのベルトをツインテールさんが持ってた！ これ、謎でしょ謎でしょ！？ でも理子には推理できた！ できちゃった！」

理子は興奮した様子で、自分の推理を述べる。

「キーくんは彼女の前でベルトを取るような何かをした！ そして彼女の部屋にベルトを忘れてきた！ つまり2人は――熱い熱い、恋愛の真っ最中なんだよ！」

この推理（？）によって、クラスの盛り上がりは最高潮へと達した。

「キ、キンジがこんなカワイイ子といつの間に！？」「影の薄いヤツだと思ってたのに！」「女子どころか他人に興味なさそうなくせに、裏でそんなことを！？」「ありえねえ！！」「女に興味ないんじゃないかったの！？」「フケツ！」

1学期のクラス替えを終えたとは思えないくらい息の合った連携を見せる2年A組。

「お、おまえらなあ……」

キンジが頭を抱え、机に突っ伏したその時――。

「おい、うるせーぞおまえら。中二のノリですかコノヤロー」

『!?!』

いままで黙っていた銀八が口を開き、クラスの視線がそちらへ向かう。

「……ったく。告白だの恋愛だのでいちいち騒ぎすぎなんだよオメーら」

ぼりぼりと後頭部をかき、銀八は理子を指差す。

「えーと、さっきバカな推理ぶち上げたおまえ。えーっと……」

「峰 理子でっす!」

銀八に指差され、理子は両手で敬礼のポーズを取りながら名乗った。

「峰。おまえの推理には大きな誤りがある」

銀八の発言に、クラスの中でざわめきが起こり、キンジは顔を上げる。

そう、銀八は朝の一部始終を見ているのだ。当然、キンジと転入生の仲が誤解ということも知っているはずだ。

助け舟を出してもらえたと、少し感動してしまうキンジ。

「いいか? そいつは転入生の部屋にベルトを忘れたんじゃないか?」

キンジを指差したまま。銀八は言い放った。

「体育倉庫で忘れたんだ」

「——って、訂正するところかよおおおおおおおおおツツツ!!!!」

全然、見当違い所を訂正され、キンジは思わず立ち上がって盛大にツッコんでしまう。

「体育倉庫!?!? なになにどういうこと!?!? 理子に教えて先生」

！」

「うるさい、バカ理子！ お前はもう喋るな！」

興味津々に聞こうとしている理子を止めようとするキンジだが、銀八はかまわず話を続ける。

「俺ア見たんだよ。そいつと転入生が、抱き合って体育倉庫に突っ込んで行くのをよお」

「いや！ だから、なんでそこだけ抜き出して言うんだよ！？」

銀八の証言は確かにまちがってはいない。

……が、その前後の過程を省略しているため、内容がおかしな方向へ進んでしまっているのだ。

もちろん、クラスの皆はそんなことを知るよしもない。

「体育倉庫でだとお！！？」「しかも抱き合って！？」「なんて大胆な行動しやがんだ！！」「むしろ、尊敬しそうだぜキンジ！」「フケツ！！」

火にガソリンを注ぐが如く、クラスはさらに盛り上がりを見せる。

「いいかオメーら。今は自室でベルト取るなんざ古イんだよ。ベルトを取るなら体育倉庫。ここテストに出るぞー。メモっとけー」

『はい！！』

クラス全員が声を揃え、果てしなくどうでもいい知識を国語ノートにメモし始める。

「ただだけ息合ってたんだおまえら！！」

「お、ま、え、ら、なあゝ……！！！」

キンジは再び頭を抱えて、机に突っ伏したとき――

ずぎゅん！　ずぎゅぎゅん！

鳴り響いた2連発＋1発の銃声が、教室内を凍りつかせた。

――顔どころか耳まで茹ダコのように真っ赤になった転入生が二丁拳銃を抜き、撃ったのである。

「れ、恋愛だなんて……くっだらない！」

大きく広げられたその両手の先にある、左右の壁に1発ずつ穴が開いていた。

さらに最初に撃った1発は、銀八の頬をかすめ、後ろの黒板に穴を開けていた。

立ち上がってはしゃいでいた理子は、ず、ずず、と着席。

銀八は立ったまま石化したように固まってしまい、冷や汗をだらだら流している。

「全員覚えておきなさい！　そういうバカなことを言うヤツには……」

それが転人生——神崎・H・アリアが、武偵高のみんなに発した最初のセリフであり。

銀八とキンジが数多く聞き続けることとなるセリフだった。

「——風穴あけるわよ！」

これが、かつて『白夜叉』と呼ばれた伝説の侍——坂田 銀時と、後に『緋弾のARIA』と呼ばれる伝説の武偵——神崎・H・アリアと、そのパートナー——遠山 キンジの、最低最悪の邂逅であった。

第五訓『最初が肝心だから自己紹介は多少背伸びして三割増しで話せ』

（後書き）

銀八「一ヶ月も滞るたあな……」

キンジ「呆れてものも言えないな……」

アリア「努力は認めるけど、結果がともなわないんじゃない意味ないわね……」

蒼月「……すみません」

蒼月「気を取り直して、次回はオリジナルのサブストーリーを入れます！」

第二訓で出た『オリキャラ』と銀さんがコンビを組む理由になった話です！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1501q/>

銀魂×緋弾のアリア SS(ダブルエス)

2011年5月14日21時25分発行